
俺が、異世界を救う？

その輪廻の先にある物は・・・

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が、異世界を救う？

【Zコード】

Z5414R

【作者名】

その輪廻の先にある物は・・・

【あらすじ】

え？ あらすじ？ そんなものは、決してない！ あるはずないだろう！ だって、プロローグに全部書いてしまっているのだからwww とりあえず、言える事は異世界系で主人公最強？ です。
(1～3日に1話ずつぐらいの更新速度でいけたらいいなと思つてます。)

プロローグ（前書き）

いつも、初めましての方は始めまして　ｗｗ
前作を見ている方は、お久しぶりです　ｗ
その輪廻の先にある物は・・・です。

正直、面白いのかどうか、自分でも分からせん＾＾；

自分が、とりあえず納得できるという内容にしてるので・・・

まあ、楽しんでいただければ幸いです^_^

それでは、本編プロローグのまつ　びつを　ｗ

プロローグ

とある宇宙の

とある星の

とある時代の

とある時間の

とある大陸

『グゼリア大陸』

に

とある勇者と、とある魔王がいた。

勇者は、旅の途中で仲間になつた人たちと
この大陸を魔王の支配から護るために戦つた。

魔王は、向かつてくる敵　　勇者　　を倒すために戦つた。

あるときは、勇者達が傷を負い

またあるときは、魔王が傷を負つた。

幾度と続いた戦いの末、勇者達は魔王を打ち倒し、平和を手に入れ
た。

しかし、それはつかの間のことだった・・・・・

やがて、世界は滅びようとしてた。

大陸の平和を護ることはできたが
引き換えとして、世界を護ることはできなかつた。

なぜならば、世界は魔王と繋がつていたのだから・・・・・

魔王が死すれば世界は死に

世界が死すれば魔王は死ぬ運命だつたのだ。

それは、誰にも予想することはできず
そして回避することすらもできないことであった。

だが、勇者達はある決断をした。

そう

それは

神々に頼み、この世界を救つてくれる人間が現れるまで、この世界の時間を永久的に止めてしまうこと・・・

人々は、変えられぬ運命を変えるために、それに同意した。

そして

神々に、人々は皆共に祈り

神々は、世界の時間を止めた。

この、物語は、この世界を救うために現れるであろう『モノ』が現
れ、そして救うまでの物語である。

プロローグ（後書き）

ん～・・・なんか、ぱつとしない・・・^ ^ ;

やはり、文才ないです・・・私・・・

まあ、楽しんでいただけてたら幸いですw

ちょっと、いろいろと立て込んでいて更新が鈍足かもしだせませんが
お気に入りにいれてもらって、たまに確認でもしていただけないと
更新しているかもしだせん(^ A ^)

それでは、また次回お会いいたしましょう!~!

第一話（前書き）

いつも、その輪廻の先にある物は・・・です

地震の影響やばいですね・・・日本どうなるんだろ・・・

とつあえず気持ちを切り替えて、第一話どうぞ

第1話

突然だが

この世界は、つまらない。

同じことを繰り返すだけの毎日。

何も変わらない、何も変えられない。

俺は、そう考へていて。

現に今、俺は学校・・・詳しく述べば、高等学校で、つまらない授業を受けている。

授業内容自体は変わるが、卒業までは毎日同じ日々を過ぐすだけ。何も変わらない日常が、俺はとてもつまらなくてそして、面倒だった・・・。

「であるからして、この公式を書いてはめると

今は数学の授業中で数学の教員が、教団に立つて、そんなことを言つて公式を書いていた。

俺はとこうと、席が丁度外の窓側の一一番後ろなのでノートと教科書だけを開いてあとは、頬杖を突いて、窓の外を見ていたりする。

(やはり、なにも変わらないな・・・。)

俺は、そんなことを考えながらも授業中は、ずっと窓を眺めていた。

(キーンゴーンカーンゴーン)

すると、授業の終わりを告げる鐘がなる。

「…………それで……って、もう授業終わりか。よし、このあと
の問題は宿題にしておく。各自ノートに書いておくよい。」

そんなことを、言つて教員は教室を出て行った。

教員が出て行くと、クラスの連中は
隣や友達などと話をし出したり、弁当を食べ始めたり、教室をでて
行つたりしていた。

時間的には、ちゅうど休みなのだ。

そんな時の俺はとこりと、相変わらず窓の外を眺めていた。

「ん？ 皇杞は、また空眺めてんの？」

そんな俺に、声をかけてきたので、横を見てみると

「…………なんか用か？ 四季咲」

四季咲 しきあき
陽平 よっぺい

入学当初からじつこく俺に付きまとつやつだった。

「なんか用かって……親友に、そんな冷たく言わなくてもいいじ
やんか。」

「誰が、親友だ。誰が。」

「お前だよ、お前。」

「誰だよ、お前って？そんな名前のやつ知らんぞ俺は。」「

「お前は、子供かっ！？・・・俺の田の前にいるお前だよ、

皇杞

幸也君？」

そう言いながら、俺へと指を指してきた。

「君付けするな、気持ち悪い。虫唾が走る。」

「ちょー？そこまで言わなくともこことだらうがよー。」

「つむれこ、少し静かにしむ。つむれこで面白いだ。」

そう言いながらも、俺はまた空を眺め始めていた。

すると、四季咲が

「なにか、見えるのか？」

「いや何も」

「じゃあ、なんできつと外眺めてんのさ？。」

「・・・つまらないから。」

「は？」

「何も変わらない日常がつまらなくて、することがないからずっと眺めているだけだ。」

「ふーん。ま、なにかおもしろいもん見つけたら教えてくれよ。」

「ああ。」

そんな、会話をした後、四季咲はどこかへ行ってしまった。

俺は、やっと静かになつたと思いながら放課後になるまでずっと空を眺め続けていた・・・。

第1話（後書き）

はい、後書きです。

やつぱり、文才ないんだろうな～・・・
なんか、会話ばっかだった気がする^ ^；

コメントや誤字脱字の報告などお待ちしております。

次回は、皇杞と四季咲のキャラ設定でも出でたりと思っています。
では、また次回お会いいたしましょう。

キャラ設定　その一（前書き）

いつも、その輪廻の先にある物は・・・です。

予告通り、今回はキャラ設定です。

キャラ設定 その1

- 【名前】：皇杞 幸也
【身長】：178cm
【誕生日】：9月14日
【年齢】：17歳（高校2年）
【容姿】：一般的な黒髪黒眼（キャラ画的には、屍鬼の結城 夏野）
【好きなこと】：空を眺めること、読書
【嫌いな物】：気に入らないやつ

【備考】

家は一般的。体格は細いが、スポーツは基本的に何でもこなせる。テストの成績も、上の中と頭がいい。但し、世の中がつまらないと思つていて、授業をまともに受けていないので、そのせいで教師からの評価点は低い。口数も多いほうではない。

容姿はいいので案外モテる。（10人中7人は振り返るぐらい・・・？）

しかし、性格からか彼女いない暦＝自分の年齢である。

本人は、彼女はあまり必要のないものだと考えてはいる。

- ・能力（単位はE～EXで表します）

【体力】	：C -
【魔力】	：無
【筋力】	：C
【耐久】	：D -
【俊敏】	：C +
【知力】	：B
【幸運】	：C
【宝具】	：無

【危険察知】 : C

【名前】 : 四季咲 しきあき 陽平 ようへい

【身長】 : 173cm

【誕生日】 : 8月26日

【年齢】 : 17歳(高校2年)

【容姿】 : 茶髪黒眼(キャラ画的には、弟キヤツチャ―で俺ピッチ

ヤーでーの笹崎 新平)

【好きなこと】 : 特に無し。

【嫌いな物】 : 特に無し。

【備考】

家は一般的。成績のほうは、中の中と平凡。授業はちゃんと受けていない。

容姿も普通。特に突発した所はない普通のやつである。
あるとすれば、ノリがいいのと、明るいことくらい。

入学式の時に隣が皇杞だつたため、入学当初から話をかけていて、
親友だと思っている。

時々、姿が見えないと言われるときも・・・・?

・能力

【体力】 : C
【魔力】 : 無
【筋力】 : D +
【耐久】 : D

【危險察知】	：	無	：	D	：	C	：	C
	：	C	+		+		-	

キャラ設定　その一（後書き）

とりあえず、現時点の主人公（皇杞）の能力と四季咲を書いてみました。

まあ、少しの間は、日常の話になると感ります。

もしかしたら、つまらないかも^_^；

では、また次回お会いいたしましょう。

第2話（前書き）

どうせ、その輪廻の先にある物は・・・です。

ん～・・・地震のせいで、電力足りなくて強制停電させられる地域
があるみたいですね^ ^；
皆さん、大変でしょうが、がんばりましょうー。

それでは、第2話どうぞ

第2話

俺はあれから、家に帰った。

正確に言つと、すでに家の自分の部屋にいるわけだが。

結局は家に帰つてもすることはない、ただただベットの上で寝転んでいた。

「いや、つまらないことだが家族構成でも言つておけ。

父、母、俺、姉の4人家族で、俺と両親は同じ家に住んでいるが、姉は一人暮らしをしている。

というのも、姉は現在アメリカについて、最新の医学を研究しているのだそうだ。なぜ、確信がないかといふと、年はかなり離れているため会つた覚えがなかつた。

それに、アメリカに行ってからは、一度も家に帰ってきたことはないそうだ。

たまに、国際電話がかかってくることがあるらしいが、俺には興味がないことだつた。

自分の姉がどうしていよつが、俺には関係ない。どうせ、なにも変わらない日常なのだから。

その日はいつも通り、夕飯を食べた後、風呂に入り、就寝した。

（結局、今日もなにも変わらないか……ま、期待しても意味は

ないか。）

そんなことを考えながら、俺は眠りについた。

・・・・

（次の日）

朝、目が覚めると俺は、不思議な所にいた。
いや、『空間』と言つたほうが正しいのかもしない。

なぜなら、俺の周りは全てが

”白かった” のだから。

「なんだ、 じじは？」

自然と俺は愚痴をもらした。

それは、 わうだらう。

なぜなら、 起きたら自分が『白い空間』にいたのだ。
驚かないまづがおかしい。

「・・・夢でも見ているのか？」

そう思つしか、 俺にはできなかつた。

な、 もつ一度眠るとす・・・

「こや、 これは夢の世界ではないぞ。」

「（一・?）」

急に声をかけられたことに驚いた俺は、 飛び起き周囲を確認した。

すると、 俺の後ろに白い服を着て荒削りな杖を持つた爺さんがいた。

「誰だあんたは？」

「ふむ、 言葉がなつておらんの、 小僧。 ・・・まあよこ、 それくらい威勢のあつまづがよからう。 ここに来たところ」とは、 お主が例の『モノ』か。」

爺さんは、俺を見極めるような目で見ていた。

「例の『モノ』だと？なんだそれは？」

俺は、疑問に思つたことを質問してみた。

「・・・・そうか、なにも知らないのは当たり前か。ならば話すとするかの。」

そう言つと、爺さんは真面目な顔になり、話をしだした

「ああ、頼む。」

「・・・・まず、この世界とは違つ、言つなれば異世界が無数にある。その異世界は、お主の住んでいる地球で、お主が女じやつたり、もしくは存在しないというような世界がある。お主たちの言葉を借りるとするならば、パラレルワールドというもののじや。その無数にある異世界のなかの一つの星に『グゼリア大陸』というものがある。そこは縁豊かで、人間族、魔族、エルフ族、獣人族、天使族住んでおつた。あるとき、魔族の王『魔王』が人間族、エルフ族、獣人族、天使族の国を侵略し始めた。人間族、エルフ族、獣人族、天使族は抵抗をしたが、打ち勝てるものはいなかつた。魔族は、その間に、大陸の4分の3を支配し、最後の侵略をしようとしていた。そんな時に、人間族に、『勇者』というものが現れた。その者は、人間族、エルフ族、獣人族、天使族では、持ち得ない力を持っており、『勇者』は、仲間とともに、『魔王』へと挑んだ。」

「なるほど・・・・結局、どうなつたんだ？」

「『魔王』に挑んだ『勇者』達は、幾多の戦いの末、『魔王』を打ち倒すことができた。」

「ほう、さすがだな。ということは、その大陸は平和が訪れたんだな。」

俺は、素直に勇者やるじゃないかと思つていた。

「わづじや、平和は訪れた。」

「だつたら、俺は何の関係が

」

そう、平和が訪れたのなら、俺とは何の関係が・・・。

「まあ、待て。話には続きがあるんじや。」

「・・・・どうこいつ」とだ?「

俺は、眉を潜めて質問した。

「話を戻そ。・・・たしかに、『勇者』達は、『魔王』を打ち倒し、平和を手に入れた。しかし、それは、つかの間のことだつたのじや。 そう、世界は滅びようとしていた。」

「ん?どういふことだ?まつたく話が見えないのだが・・・・」

「まあ、普通ならそうじやるつな。なぜ世界が、滅びへの道を進むことになってしまったのか・・・それは、『魔王』と世界は繋がつていたのじや。」

「『魔王』と世界が繋がつていただと?」

「そつじや。魔王が死すれば世界は死に、世界が死すれば魔王は死ぬ運命だったのじやよ。」

「なつー？そんなことがありえるのかー？」

「・・・現にそなつておるのじやよ。」

「ふむ、その異世界のことについては分かつたが、結局俺はなんなんだ？」

「その後、世界が救えないと思つた勇者達はある決断をしたのじや。」

「決断？」

「そつ。神々に頼み、この世界を救つてくれる『モノ』が現れるまで永久的に時間をとめるこじを。」

「・・・なるほど。その救つてくれる『モノ』つてのが俺つてことか。」

俺は、面倒な話だ・・・と思い、頭を搔きながら、そつひ言つた。

「そつじや。」

「んで、俺はそつすればいい？」

「そつじやな。今ままでは、到底無理であろうつな。まず、力がない。」

「なるほど、合理的だ。だがどうやって、力をつかる？」

「簡単なことじや。ほかの世界へと行って、修行をするのじや。」

「なん……だと？」

「まあ、もう驚くでない。仕方のない」とじや。しかし、今すぐこれは言わん。いろいろと考えることもあるだらうし、いくつか能力を与えなければ、なにもできんじやうからな。じやから、お前達の世界の時間で3日の猶豫を許さへる。それまでに、覚悟と正しい能力でも考えておくれ」とじやの。」

「……分かった。」

「ならば、寝るが良い。次に起きたときは、お主の部屋のベッドの上じゃねり。」

「ああ。」

そう言つて、俺は、この世界から逃げるために、眠りに着いた。

ただ、いつもとは違い、たしかな「期待」と「希望」を持つて……

第2話（後書き）

はい、あとがきです。

何も書く」とないです。

言つゝ」とといえば・・・

誰か私に、文才を分けてください。

あと、感想や誤字脱字などおまかしてあります。

それでは、また次回お会いいたしましょう。

いつも、その輪廻の先にある物は・・・です。

このたびの、お知らせは、この小説の一時停止についてです。

この小説は、Arcadia様の「」投稿掲示板のほうにも、出させていただいたのですが
そちらで、見てくださった方のご指摘で、勝手ながら、この小説を
初めから修正することにさせていただきました。

ご期待をされていた方なども、もしかしたらいらっしゃるかもしれません
が
ご了承のほうをお願いいたします。

前作も今作も、不甲斐ない気持ちでいっぱいです。

この度は、とてもすいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5414r/>

俺が、異世界を救う？

2011年10月7日10時43分発行